

八幡・西上浦の歴史(2)

ふるさとの歴史発見

染 矢 寛 二

(会員 佐伯市八幡)

一、魚肥(干鰯・鰯粕)で栄える佐伯地方霞ヶ浦地区

一、大阪、住吉大社に奉納された石灯籠

江戸時代は摂津の国と言われ、大阪城の南西、現在の大阪市住吉区にある住吉大社は、海上交通の守護神として全国二三〇〇社と言われる住吉神社の総本社である。

その住吉大社に延享三年(一七四六)九月、干鰯問屋・大阪新天満町「天満屋」を願主とする西国諸浦の網元、船主、商人たちが石灯籠を奉納した。銘文には豊後、瀬戸内、日向、土佐、阿波、紀伊の浦の名が並んでおり、その中に佐伯四二浦の名前と、世話人、代後浦鶴野小兵衛他十名(計十一名)の名や晞干浦、世話人、石田吉左衛門他九名(計十名)の名も刻まれていた。



石灯籠が奉納されている住吉大社、吉祥殿前



願主 大阪新天満町
天満屋七郎兵衛



奉納された石灯籠



晞千浦、石田吉左衛門他9名(計10名)連記、
延岡・磯屋久平他1名が記されています



代後浦、鶴野小兵衛他10名(計11名)連記されて
います



豊後の国佐伯
浅海井浦・日見浦・津久見浦・代後浦……

魚肥とは、干鰯・メ粕など、魚を加
工して作られた肥料のことで、近世の
農村における金肥きんぴ(お金を出して買う
肥料)の中で代表的なものの一つだっ
た。魚肥はさまざまな魚からつくられ
たが、おもな原料は鰯いわしと鯿にしん(鯿)であ
る。鰯魚肥は全国で生産されたが房総
半島・九十九里浜(千葉県)や豊後水
道沿岸(大分県・愛媛県)など特産地

も成立した。また鯨魚肥は蝦夷地（北海道）で主に生産された。いずれも全国的に流通し遠隔地の農村にまで運ばれるという特徴をもった商品だった。

近世の大阪周辺には、木綿・菜種の商品的農業が発展し、当時、生産が拡大、付加価値が高く、多くの肥料を必要とした綿花栽培に主に使用されたが、その販売の仲介をしたのが大阪干鯛屋仲間（問屋と仲買）であり干鯛問屋「天満屋」であった。干鯛屋仲間は寛永三年には二五〇名を数え、大阪に入荷した干鯛・メ粕を独占的に扱った。

二、大阪における魚肥の流通拠点

佐伯産干鯛の入荷場所「鞆の島」

大阪城より海岸部に位置し、船での運搬に便利なように堀川を掘削し造られた人工の堀がある。その中に鞆の島と呼ばれていた所がある。佐伯産の魚肥（干鯛・メ粕）が船で運ばれ、荷揚げされていたのがこの場所であった。「鞆の島」とは、大阪城下淀川沿いにいた魚商人たちが、海に近く、船着きに便利な当地の新地開発を願い寛永元年（一六二四）に新たに「永代掘」を開削、掘留に永代

浜が設置され、幕府より「永代諸魚干鯛揚場・市場」として認められたことを機に大阪での干鯛取引が盛んになり干鯛仲買も増えていった。

干鯛屋仲間は原則としてこの鞆の島とそれに隣接する限られた地域に店を構えなければ取引ができないという決まりがあったという。

この鞆の島・永代浜に荷物が着船すると問屋の元で、仲買が競りを行い、魚肥を取引した。魚肥は砂の付き具合など品質にばらつきが大きく、積み上げて調べなければ値が定めにくかった。市は三〜五月、九〜十月は月三回、その他は二回であったが、着船があると随時行われた。

市では浜に積んだ干鯛の上で問屋が仲買に競らせたが、最盛期にはその喧噪のため、意思の疎通ができなかった程だといわれていた。市で取引されたのは、西国・関東物で、北海道松前産の鮭粕などは入札であった。

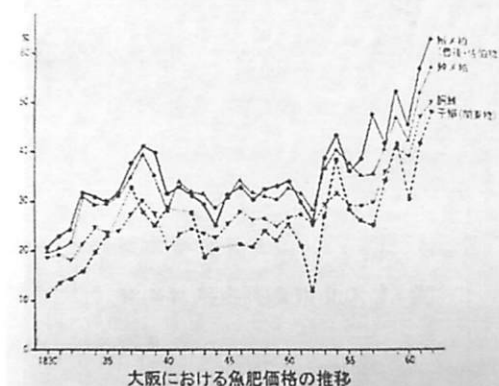
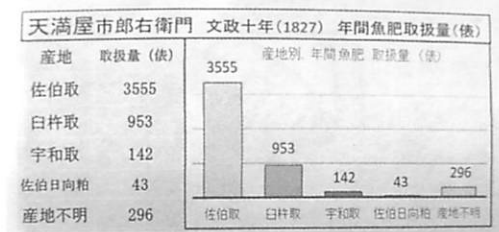
三、文政一〇年（一八二八）、天満屋の年間魚肥

取扱量と天保元年（一八三〇）～文久二年

（二八六二）間の魚肥価格の推移

住吉神社に石灯籠を奉納した天満屋七朗兵衛より八十一年後、干鰯問屋・天満屋市郎右衛門の文政十年（一八二七）年間魚肥取扱量（俵）は合計四九四六俵とあり、内訳をみると佐伯産が大多数を占め、ついで白杵産の順となっている。

*参照・東洋大学人間科学総合研究所紀要第15号「大阪干鰯屋仲間と近江屋長兵衛」より集計



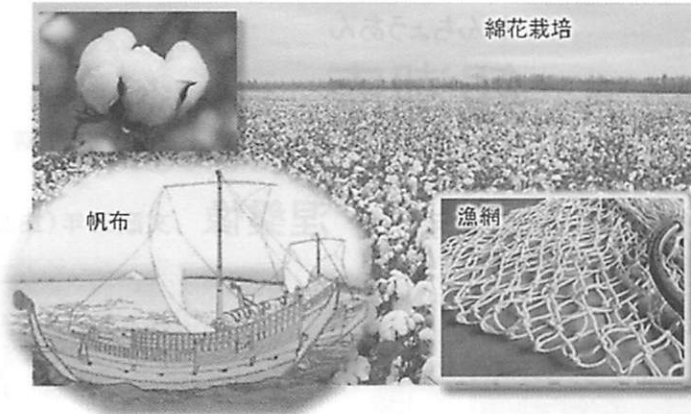
大阪における魚肥価格の推移

住吉大社に石灯籠を奉納した願主・天満屋七郎兵衛と、この天満屋は同一の問屋であるかは不明。同じ屋号でも分家、別家にて新たに問屋を開業している場合があるためである。

大阪における魚肥価格の推移と産地間の比較をみると、天保元年（一八三〇）～文久二年（一八六二）の三二年間でほぼ一貫して鰯ノ粕（豊後佐伯物）が干鰯（関東物）や鯨ノ粕・胴鯨（北海道・松前産）より高値を維持している（佐伯物が一等品としてブランド化していた証明）。

*参照・人文地理第42巻第5号（一九九〇）

「近世近江の国における魚肥の魚種転換と流通構造」より
近世に入って干鰯需要は綿花・菜種・茶・葉煙草などの栽培の拡大につれて全国的に拡大の一途をたどった。関東方面の肥料需要増大の結果、一八世紀中期以降大阪市場への関東産干鰯入荷量が減少（享保九年（一七二四）百三十万俵が一八年後の寛保二年（一七四二）には二五万俵に減少）。一方で全国的（特に西日本）に農業生産はめざましく、地方生産地での消費拡大（地産地消）により、大阪市場への入荷量が減少、さらに追い打ちを



かけるように全国的に鰯の不漁が続き、干鰯価格の高騰を招いた。それに伴い農民の干鰯価格高騰に対し国訴が続発、元文五年（一七四〇）〜天保六年（一八三五）の九五年間に計一〇回と回数も多く、訴訟村数など規模も大きい。

一九世紀以降、松前産（北海道）の入荷量が増加、鰯に替わって鯨魚肥が安政年間（一八五四〜五九年）には圧倒的な比重を占めるようになるが、大阪市場において佐伯産干鰯は根強い人気があったという。

*参照・同志社商学第63巻第5号「徳川幕府の経済政策と地方経済」より

海運・漁法を大きく変えた綿糸

綿作りの普及により帆船の材質が筵・麻から綿布に替わった。綿布は丈夫で扱いやすく、それにより遠距離航海、航海日数の短縮が可能となった。

また、綿糸は地引き網に利用され、漁法を大きく変えたと言われる。

四、霞ヶ浦地区、観潮庵に寄進された

船乗り観音と涅槃像（掛け軸）

笹良^{さざらめ}目の観潮庵に享和元年（一八〇一）船乗り観音を、文政五年（一八二二）像（掛け軸）が奉納されているが、魚肥（干鰯・メ粕）販売で財を成した漁民による寄進といわれ、また、大宮八幡神社の三体の神輿の内二体は代後、笹良目地区（いずれも霞ヶ浦、他一体は戸穴地区）が出しており、この限られた地区で二体もの神輿を持つのは往時の繁栄によるものと考えられる。

かんちょうあん
干鰯で栄える霞ヶ浦 観潮庵 霞ヶ浦 笹良目
 第七十九番所 天皇寺 本尊 十一面観世音菩薩

船乗り観音 享和元年(1801)九月

涅槃像 文政五年(1822)



干鰯関係年表(1)

- 寛永元年 大阪「永代浜」に干鰯荷揚場創設以降、干鰯問屋増加する。
- 宝永六年 大宮八幡神社、大祭を行い^{はまだし}濱出の式を復す。
濱出の儀式は古くよりあり(大宮八幡宮記より)
- 正徳四年 大阪市場の干鰯量は、銀換算で一万七千貫目に達した。
- 元文六年 大阪の取引高をみると、干鰯は3492貫余で、生魚・塩魚の合計に匹敵している。
- 天文五年～天保六年
干鰯価格高騰、大阪近郊における農民の国訴増加(95年間に10回)
※18世紀中期以降、関東の肥料需要増加により、関東産干鰯の大阪市場入荷量減少、全国規模で農業生産の拡大鰯の不漁傾向が原因。
- 延享3年 住吉大社に石灯籠奉納
- 天明4年 佐伯藩開設の大阪差配所が不評で閉鎖

干 鯛 関 係 年 表 (2)

- 享和 元年 笹良目の観潮庵に船乗り観音奉納
- 文化11年 干鯛問屋天満屋の佐伯産取り扱い量3555俵(別表)
※19世紀以降 北海道・松前産 鯨粕の入荷が増加傾向
- 文政 5年 笹良目の観潮庵に涅槃像奉納
- 文政～嘉永 佐伯藩は干鯛一俵15貫目(56.25kg)入りを、藩札30目で買い上げている。
- 天保 年間 藩札価値は文政～嘉永時代に比べ、半額以下に下がる。
- 天保 9年 一俵10貫目につき、運上銀10匁と決められて自由販売となったが総生産高5000俵(銀高50貫目約770両)と定められ、高松浦には80俵が賦課(割り当て負担)された。
(高松浦庄屋 平兵衛の日記より)
- 嘉永 元年 大宮八幡神社の獅子舞が始まる。
- 安政 年間 大阪干鯛屋仲間が取り扱った年間魚肥量の中で、松前産鯨魚肥が圧倒的比重を占めている。

二、太平洋戦争・八幡地区に落ちた爆弾

太平洋戦争中の昭和二〇年五月一日正午、地区が米軍の空襲により被災した。天候は曇り、空は雲が立ち込めており、B29の姿は見えなかったようですが、上空からカラカラと音を立てて爆弾が落ちてきたそうです。次々と落ちる爆弾の爆風で家の戸が吹き飛び、とつても恐ろしかったそうです。落ちた爆弾は10～30個位(正確数不明)、多くは山の方にバラバラと落下、民家には二個落ちました。時限爆弾も含まれていたそうです。地区の人は防空壕に逃げていたためか死んだ人はいませんでしたが、怪我人が数名出ました。当時の話では、野口地区の方に爆弾を落とすつもりが誤って百枝地区に落とすのではとの話だった。

この時、百枝地区に住んでいた、当時小学校四年生だったあつこさん(現・宇戸区在住)は六五年程経った今でも(十年前の聞き取り)、時々爆弾から逃げる夢を見るそうです。

それ以外にも、笹良目浦の民家が機銃掃射を受けた話(弾の痕が家の柱に残っていたなど)やセメント工場に

百枝地区におちた爆弾

昭和二十年五月一日 正午

聞き取り調査にて作成

写真は昭和23年
米軍撮影



も爆弾が落ちたとの話がある。

2017年(平成29年)9月5日の大分合同新聞記事より

米国防総省、佐伯で遺骨調査

太平洋戦争中の1945年3月18日佐伯湾に墜落した米軍機「コルセア」のパイロットの遺骨を調査するため霞ヶ浦を訪れた米国防総省、戦死行方不明者捜査局。

アジア地域の遺骨や遺品を調査している

佐伯海軍航空隊空襲に使用された戦闘機「コルセア」同型機



2017年(平成29年)9月5日 大分県

太平洋戦争で墜落 米軍パイロット



埋葬された? 墓地視察 地域住民から聞き取り



米国防総省は「佐伯沖に墜落した米軍機「コルセア」のパイロットの遺骨を調査するため、佐伯市を訪れた。佐伯市では、佐伯沖に墜落した米軍機「コルセア」のパイロットの遺骨を調査するため、佐伯市を訪れた。佐伯市では、佐伯沖に墜落した米軍機「コルセア」のパイロットの遺骨を調査するため、佐伯市を訪れた。

米国防総省

佐伯で遺骨調査

佐伯市では、佐伯沖に墜落した米軍機「コルセア」のパイロットの遺骨を調査するため、佐伯市を訪れた。佐伯市では、佐伯沖に墜落した米軍機「コルセア」のパイロットの遺骨を調査するため、佐伯市を訪れた。

三、米国防総省・戦死行方不明者捜査局、

佐伯（霞ヶ浦）で遺骨調査（二〇一七年九月四日）

市教育委員会などによると、1945年3月18日、旧

日本海軍の基地があった同市を米軍が初空襲、二機のコルセアが墜落（空母イントレピッドの艦載機で、一機は急降下からの引き起こしに失敗、海面に激突し行方不明。もう一機は四国南西海上にて燃料切れ不時着し行方不明）。

尚、五月十三日にも艦載機が墜落している。

霞ヶ浦地区では「近くの浜に打ち上がった身元不明の遺骨を埋葬した。」

かわいそうに思った地区の人が埋葬、お墓が無いため古い和尚さんの墓石を添えて供



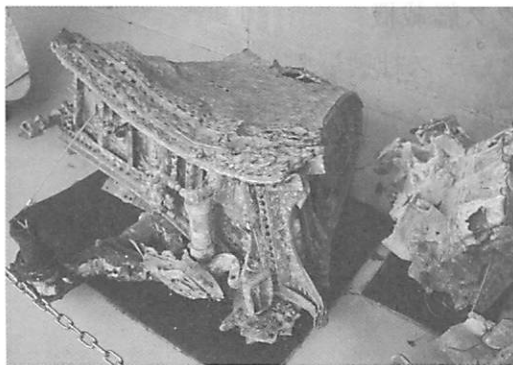
養したとの話。また、「浜辺に緑色の服が打ち上がったのを見た」「母から漁船の網に頭がい骨が掛った話を聞いたことがある」との話が伝わっている。

佐伯湾に墜落した米軍機

戦後七十年を期に、米国の要請により寄贈、返還されたコルセアの機体の一部。

現在は、イントレピッド海上航空宇宙博物館で所蔵されている。

エンジンとプロペラ



佐伯湾に墜落した米軍機

佐伯市平和祈念館「やわらぎ」

屋外展示1 米軍機のエンジン・プロペラ

佐伯湾で引き揚げられました。エンジンの型式やプロペラの特徴から第二次世界大戦で使用された米艦上戦闘機 F 4 U - 1 D コルセアのものと考えられます。

昭和20年(1945)3月16日、佐伯市は初空襲を受けました。米軍の記録では、この時、F 4 U - 1 D コルセア一機が港に墜落、搭乗員のローラン・イスレイ少尉が行方不明となっています。佐伯湾で発見されたこの部品は、イスレイ機のものかもしれません。

佐伯飛行場付近に墜落した米軍機

3月18日に撃墜された空母イントレピットの艦載機

5月13日に撃墜された空母エセックス・空母モンレー艦載機
いずれかの機体の残骸と思われます。

1945年3月18日 空母イントレピット艦載機

F - 4 U (機体番号82305) ポート社制戦闘機コルセア

急降下からの引き起こしに失敗 海面に激突し行方不明

F G 1 D (機体番号82720) グッドイアー社製戦闘機コルセア

四国南西海上にて燃料切れ不時着し行方不明

1945年5月13日 空母エセックス艦載機

S B 2 C (機体番号20975) カーチス社製爆撃機ヘルダイバー

S B 2 C (機体番号20839) 空母モンレー艦載機

T B M (機体番号68849) ゼネラルモーターズ社製雷撃機ア

ベンジャー



